

「21世紀に輝くヒューマントータルケア病院」の再開発工事が始まる

鹿児島大学名誉教授 伊藤 学而
(元 歯科矯正学講座)

平成19年11月、鹿児島大学医学部・歯学部附属病院長の高松英夫先生から、同病院の再開発が始まるのご案内をいただいた。平成28年度の第一期工事完了まで10年計画で行なうとのことであるが、その説明用パンフレットの表紙に「21世紀に輝くヒューマントータルケア病院」と書かれていた。これを見たときの驚きと喜びは格別であった。

平成12年度から平成13年度にかけて、医学部と歯学部をもつ国立大学では、大学院研究科と附属病院の両方で、それぞれの統合問題がのびきならない状況で突きつけられていた。

鹿児島大学では、大学院研究科の統合問題は医学部が担当し、附属病院の統合問題は歯学部附属病院が担当して、それぞれに準備室を設置して新構想を練り上げた。この「21世紀に輝くヒューマントータルケア病院」の文字は、鹿児島大学の附属病院の将来像として打ち出した新構想病院のキャッチフレーズであったのである。私は当時、歯学部附属病院長であったので、このキャッチフレーズを付けた説明資料を持って文部科学省との打合せに臨んだことを鮮明に覚えている。

医学部附属病院と歯学部附属病院は、平成15年10月には統合して「鹿児島大学病院」となったが、従来の病院の建物を廊下でつなげただけのものではあった。この度、夢の病院の実現に向けた再開発工事がようやく始まることになり、当時の準備室で練り上げたキャッチフレーズが甦ったのである。そして平成28年度には現実のものとなるのであるから、何にも変えがたい喜びであることを分かっていたきたい。

「21世紀に輝くヒューマントータルケア病院」が現実のものになろうとしているとき、改めて考えねばならないことが沢山ある。

21世紀は、ヒトモノも生き方も多様で、しかも時々刻々変動する。健康観についても然りである。そのなかで、健康で意義ある人生を過ごしたいと願っている人々に、われわれは何をどのように提供すればよいのだろうか。

そのためには、それぞれの地域にどんな病院がどのように配置されていたらよいのか。しかもそれぞれの病院には、どんな職種のどんなレベルの人が、どれだけいたらよいのか。医療機関の連携はどのようにすべきか。

病院の医療水準は、どのように評価し、どのように高めるのか。医療職はどのように育成し、どのように確保するのか。臨床研究はどのような体制で進めるのか。内外の医療機関との人事交流はどうすれば活性化するのか。

病院の経費はどれくらい必要か、そのための医療費は誰がどのように負担するのがよいのか。

これらの問題に答えるのは容易ではない。しかしながら少なくとも常に前向きであることは、これからの病院にとって必須の要件である。また、そうでなければ、時代の先端をいく、名の知れた病院にはなれない。

なぜなら医療の問題は、医療の受益者である住民と、医療の提供者である医療関係者と、医療制度に責任をもつ政治家や行政職、のいずれの関与が欠けても解決しないし、改善もしないからである。

「21世紀に輝くヒューマントータルケア病院」の開発工事が完了するのは10年先である。そのときの病院の運営は、現在の中堅の人たちの手に託されているはずである。そのときには真に輝く病院になっていることを、このキャッチフレーズをかざして文部科学省との打合せに参加したひとりとして心から願っている。